

## カロナールを学ぼう

### はじめに

小児の発熱から大人の頭痛・生理痛などに幅広く使用されている解熱鎮痛薬の「カロナール」は、外国では「ハラセタモール」という製剤としても知られています。

カロナールは医療用医薬品として様々な剤形・規格が販売されていますが、その理由はやはり幅広い症状や、幅広い年齢層に向けて必要な解熱鎮痛薬であるからでしょう。また、カロナールには小児にも使用できるような坐薬も存在します。坐剤は発熱時にぐったりし、食欲がなく、吐き気、嘔吐がある場合にも使用可能で便利です。



カロナール  
有効成分はアセトアミノフェン、  
国際的には「paracetamol (パラセタモール)」  
と呼ばれています。

### 解熱鎮痛剤

解熱鎮痛剤はその作用機序によって2種類に分類することができます。一つは、イブプロフェンやロキソニンをはじめとした「NSAIDs」と呼ばれる解熱・鎮痛、抗炎症作用のある薬のグループで、もう一つは、抗炎症作用はほとんどないものの、脳の体温調節中枢や中枢神経などに作用して解熱、鎮痛作用を示すカロナールのような非ステロイド性の薬剤のグループです。

### 人の発熱のメカニズムとカロナールの作用

ヒトの発熱は、脳の体温調節中枢に情報が伝わり、そこから発熱の指令が身体の各部に伝わることで生じるのですが、「カロナール」はこの体温調節中枢に作用し、熱を体外へ逃がす作用を増強する薬です。また、カロナールには、発熱や痛みの情報を伝える物質(PG:プロスタグランジン)を阻害する作用があります。

一方、カロナールはイブプロフェンやロキソニンをはじめとした「NSAIDs(非ステロイド性抗炎症薬)」と同様にCOX(シクロオキシゲナーゼ)を阻害しますが、起炎物質・発痛増強物質として知られるプロスタグランジンE2(PGE2)の合成抑制は弱いため、「カロナール」には抗炎症作用はほとんどないのが特徴です。

現在のところカロナールの薬としての作用機序は、中枢神経におけるCOX阻害と考えられていますが、現在詳細な機序は未だに解明されていません。

もし臨床症状に炎症が加わっており、さらに痛みを伴う場合はイブプロフェンやロキソニンをはじめとした解熱・鎮痛作用とともに、抗炎症作用がある「NSAIDs」を症状によって使い分けする必要があります。ただし、「NSAIDs」はカロナールに比べると胃に負担がかかることもあるため、胃薬を併用させるなどの注意が必要です。

### カロナールの市販薬

カロナールは市販薬である頭痛・生理痛薬や総合感冒薬、他小児用の解熱・鎮痛薬、小児用感冒薬に解熱・鎮痛成分として配合されています。以下は頭痛・発熱時などに用いる代表的な市販薬です。

- アセトアミノフェンのみが有効成分
  - ・タイレノールA
  - ・バファリンルナ
- イブプロフェンなど他の有効成分と一緒に配合されている複合薬、総合感冒薬
  - ・バファリンプレミアム
  - ・ノーシン
  - ・パイロPL顆粒
  - ・バブロンゴールド
  - ・バブロンキッズかぜ微粒

### バファリンについて

バファリンルナは、7歳から服用でき、1錠中にアセトアミノフェンが100mg含まれています。苦味のないフルーツ味のため飲みやすく、水なしで飲めるチュアブルタイプの錠剤です。小・中・高校生の発熱や頭痛、生理痛にも適しています。

一方バファリンプレミアムは、末梢神経の痛みの元に作用する「イブプロフェン」と中枢神経の痛みの伝わりをブロックする「アセトアミノフェン」2種類を配合している解熱鎮痛剤です。頭痛・生理痛などの症状に対し、有効成分に加え鎮痛補助成分である「無水カフェイン」と「アリルイソプロピルアセチル尿素」を配合し、すぐれた効果を発揮する薬剤です(15歳以上から使用可能です)。

上記のバファリン製剤のように、1錠あたりのアセトアミノフェンの含有成分量が異なっており、イブプロフェンなど他の解熱鎮痛剤とアセトアミノフェンと一緒に配合されている薬剤もあり、用法用量なども商品ごとに違うことがあるので注意が必要です。

### カロナールとタイレノールの違い

市販で販売されている「タイレノールA」は有効成分「アセトアミノフェン」であり、2つの薬剤の有効成分の違いはありません。タイレノールAは、主成分がアセトアミノフェンのみで、頭痛や月経痛(生理痛)などの痛みを感じる時や発熱時に用いる解熱鎮痛剤です。含有量は医療用医薬品においてカロナール錠300mgという薬がタイレノールA1錠あたりと同量の薬剤です。

この「タイレノールA」と「カロナール」の違いは、1日当たりの服用量の上限が異なるという点です。カロナールは薬の服用量の上限は症状や年齢体重により異なりますが、成人の患者であれば疾患によって1500~4000mgと上限が決まっています。

医師から出された処方箋には患者の疾患名までは記載されていないため、薬剤師と患者との服薬指導時にカウンセリングのもと、効果効能を説明しながら疾患に基づく適正な薬の量であるのか、副作用の起こる可能性はないかなども注意しながら薬剤を渡します。なお、「タイレノールA」の服用は15歳以上、1錠中にアセトアミノフェンが300mgとして1日当たりの使用量の上限が3錠(900mg)と決められています。

「タイレノールA」の1日当たりの使用量が医療用医薬品よりも少ないのは、薬局・薬店で誰でも購入できるという状況で、成分の種類や含有量などの観点から、指示されている用量の範囲では比較的安全とされていて、また誰にでも使いやすいようにという考慮がなされているためです。

### カロナール、タイレノールの併用と副作用

アセトアミノフェンは市販の多くの薬剤に解熱鎮痛目的で採用されているため、歯医者さんからカロナールをもらっていた方が、頭痛時に市販のタイレノールAなどアセトアミノフェンが含まれている薬と同時に使用することでにより、自覚なく危険な量の薬を服用してしまう可能性もあるため注意が必要です。

また、効能の違う疾患の他の薬などを服用している場合も、併用することで副作用を起こしたり、互いに作用を強めたり、効果を弱めたりする可能性もあるので、他に使用中の一般用医薬品や食品も含めて注意し、気になる場合は必要に応じて必ずかかりつけの病院の医師、薬剤師に相談してから使用するよう注意が必要です。また過量に服用することで肝臓機能障害などの副作用が起こる人もいるため注意が必要です。

### 肝障害の発現について

医療機関では、カロナールを使用するにあたり本剤により重篤な肝障害が発現するおそれがあることに注意し、1日総量1500mgを超す高用量で長期投与する場合には、定期的に肝機能等を確認するなど慎重に投与することとされています。カロナールとアセトアミノフェンを含む他の薬剤(一般用医薬品を含む)との併用により、アセトアミノフェンの過量投与による重篤な肝障害が発現する場合もあるため注意が必要です。

### 服用時に注意する人

- 1) 消化性潰瘍のある人
- 2) 重篤な血液の異常のある人
- 3) 重篤な肝障害のある人
- 4) 重篤な腎障害のある人
- 5) 重篤な心機能不全のある人
- 6) 本剤の成分に対し過敏症の既往歴のある人
- 7) アスピリン喘息又はその既往歴のある人

### 妊娠中・授乳中の服用について

妊娠後期では薬の成分が胎児に影響を与えるおそれもあるため、体調面や服用するにあたって不安があるときは、医師や薬剤師、登録販売者に相談しましょう。また、総合感冒薬にアセトアミノフェンと一緒に配合されていることのあるカフェインも過剰に摂取することで胎児の健康に悪影響となるおそれがあるため使用を控える方が望ましいでしょう。

授乳中の場合はアセトアミノフェンやイブプロフェンを服用できますが、カフェインは母乳に移行してしまうため、カフェインが配合されている総合感冒薬などは避けるほうがベターです。